
声。

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
声。

【Nコード】
N4350G

【作者名】
こつぶ

【あらすじ】
新一カウントダウン2009。1月の死羅神さまの企画にて投稿したものです。死羅神さまの声を実は聞いてたとか、蘭の見たものは死羅神さまだったのか、新たんだったのか、とか。ていうか普通にあの脚力はすごいだろうっていう話とか……。死羅神さまの話を知らない人は……。コミック61、62巻^{だっけ}を読んでから見た方がいいかも???新蘭です。

「ぐぽっ・・・」

やべえ・・・体が・・・重え・・・。
いつもならこんな・・・わけねえのに・・・

「ぐ、はっ・・・」

やっぱり・・・うま、く・・・いくはず・・・ねえか・・・
ち、くしょ・・・

「ぐ・・・ぐぽっ・・・ら・・・っ・・・はあっ・・・はあ・・・は・・・
ぐぽっ・・・こぽ・・・・・・」

?

” クド．．．ウ、シン．．．イチ．．． ”

[illegible][illegible]

誰だ・・・？

誰が話しかけている・・・？

水の中、なのに・・・なんで・・

“ワレ、ハ、シ・・ガミ・・————ソナタノ、タ・・————”

「! ? . . . ゴッぽっ」

★★★

眩しい。

高い、高い空。そうして、辺りを見れば湖が広くまるで海のように先の方まで広がって――。

「!？」

俺はがぼつと体を起こした。

気がつけば、俺はびしょぬれの洋服を着て、湖畔に横たわっていた。

頭がズキズキと痛い。けれど、その中で必死にどうして今この状況になっているのか思い出そうとする。

――今、自分は江戸川コナンじゃない。工藤新一になっていた。

確か俺は、とある人物から1年前に『工藤新一』として解いた事件で、推理に間違えを発見したという手紙をもらい、小屋に呼び出され、そこで何者かに幽閉され、脱出を試みた。あの発作を強く感じながら、小窓から子どもである体をねじ込み、そうして――。

そうだ。そうして俺は痛みと苦しさで気を失いかけながら外へ出たんだ。まさか、この小屋が崖の上に建っていたとは気づかなかっ

たが。そして、確かに俺は溺れて――。

「いったい、これは・・・・・・・・ツ・・・・！」

頭がズキズキと痛い。風邪を引いているのに、湖に飛び込んだせいだろうか、それとも。

それとも・・・・。

俺は痛みで頭を抱えつつも、必死に考える。

溺れていたとき、俺はコナンだっただろうか、『工藤新一』だっただろうか。

それすらもあまり記憶はなく。

ただ、必死に、苦痛に耐えながらも、骨が千切れそうになりながらも、死に物狂いで泳いだ気がする。

泳いで泳いで、・・・・けれど、どうしても前に進めず。

熱のせいと、薬で元に戻るその兆候のせいで、そして水の中で。

俺の意識はままならなかったはずだ。

しかし気がつけば、俺はこうしてここにたどり着いている。

体のけだるさや頭の痛さは勿論あるが、動けないほどではない。

あんなに熱の中、小屋に行き、椅子をよじ登って小窓から身を乗り出し、湖の中で一生懸命岸まで泳ごうとしたのに、だ。

「どうなってんだ・・・・？」

俺はボソリと呟いた。

いや、それよりも、だ。

何か、大切なことを忘れている気がする。

俺は、確かにあの後、何かを見た。

小屋から湖へと体を投げ出した後で……。

……いったい、何を見たんだ？

湖の中に沈む死体？車？それとも……

(いや……)

俺はそこまで考えて、強く自分の考えを打ち消した。

いや、『見た』のではない、『感じた』気がした。

そこに何かがあったわけではなくて。だからきつと湖の中をもぐっても何もないだろう。

でも、確かに俺は『感じた』。何かを『聞いた』。

それは、この鈍く衰弱しきった頭でも、確信めいたものがあつた。強く頭の中で『それ』は残っていた。

あんな絶体絶命なピンチの中でも俺の心を動かすもの。生きなきゃいけねえって思ったこと。

(ら、ん……？)

蘭が俺を呼んだのだろうか。

たまにあいつの気持ちさがトランシーバーみたいにつながるときがある。

それは、本当に欠片的なものだけど、あいつが俺を呼ぶその声が聴こえる、『感じる』時がある。

だから、どんなに遠く離れていても、強く願えばあいつの心に『

届く』ことがあるんじゃないか、なんて思ってしまう。言葉として口からでなくても、強く思えば、あいつの心の中に届くんじゃないか――なんてそんなことまで感じてしまう。

でも、今のはそうじゃないような気がした。
それとは違うタイプの――何かを感じた。

「っ……!!」

そういえば。

今になって俄かまるで湧き水のように考えが溢れ出す。

あの時、自分を小屋の中に閉じ込めてまでしたかったこと。

自分を閉じ込めて、犯人が何をしたかったのか。

そして、手紙の差出人は、かつて踏み入れたこの土地で多く関わりの持った人物――。

そして、その人物はあの幽閉された小屋に深い縁を持つ人物――。

まさか。

「まさか、あの人……」

……嫌な、予感がした。

そんなことがあるわけないと感じつつも、感じてしまうとある一つの『勘』。

とにかく、一刻も早くあの場所に戻ろう。

あの場所には、おそらく自分を閉じ込めた犯人の正体がわかる手がかりがあるはずだ。

幸い、確かあそこには『アレ』もあるはずだし。1年前と同じ状況で残っているのであれば。

顔を隠すのにはちょうどいい、『アレ』が。

この村の人たちは俺の顔を覚えている。

今のぴちぴちでびしょぬれの服を着たまま人前に出るだけでも目立つのに、俺がそんな格好をして歩き回っているなんて、『あの人』に知れたら――。

だから、まずはあの場所に戻るしかないのだ。

俺はゆっくりとその場所に向けて足を動かした。

湖から森へ。

『工藤新一』と彼を結びつける、あの場所へ――。



やっぱりそうだった。

犯人は、あの人だった。

そして、彼は人殺しまでしようとして……。

「くそっ……」

俺は呟き、どん、っと拳で強く床を叩いた。

古い木材でできたその床は、俺の拳の反動で、重く振動する。

その場所は、俺が昨日訪れた場所と同じ場所だった。
そして、俺が『工藤新一』に戻り、『この姿』にならざるを得なくなった場所。

昨日はどこか変だった。

湖から小屋に向かうときはまともに動くこともできなかったのに、森に入ったとたん、みるみる体の調子がよくなって。まるで栄養剤でも飲まされたみたいに。

(いまさら灰原のクスリが効き始めた・・・なんてな)

そう考えた後で、ハハと鼻で笑って、思い直した。灰原のくれた『風邪薬』の効果の意味はもう十分すぎるほどわかっていた。灰原と博士がグルになって俺にこのクスリを渡したのか、そもそもこのクスリはいつ、何の意図で使おうとしていたのかは謎だが。

「ん、・・・ううん」

はっと我に返り、隣を見る。

そこには先ほど手当てを終え、横になっている蘭がいる。

幸い、かすり傷程度で骨折や傷があとまで残ることはないだろう。

しかし、あまりに怖かったのか、精神的に追い詰められていたのか、気を失っていて。

「・・・ごめんな」

俺は呟き、蘭の頭をそつと撫でる。するりとした黒髪が俺の指先から数束零れ落ちた。

蘭が何故この森に来たのか、大体は見当がついていた。

あいつが一番苦手とする類のものを探しにきたのだ。

死羅神さま。

この東奥穂村に伝わる古くからの民話にでてくるこの土地の守り神。

普段は森の中にいて、穏やかに土地を守っているが、もし森の奥地に踏み込み、目を合わせてしまえば、忽ち虜にされる、と。そうしてもし崇められたら、その解き方は陽のあるうちに森へ行き、死羅神さまの姿を見つければ声を限りに呼び止める、と。

確かそんな話だった気がする。あの『記憶喪失のフリ』をしているあの人を、『死羅神さまに会って虜にされた』記憶を取られた俺だと理解したこいつは、恐怖を振り切って、森に踏み込んだ。

それで探している途中に、足を踏み外した。

捜査中、あいつの叫び声を聞いて、あわてて助けにきたわけだけど。

まさかそんなに怖い思いをさせるまで追い詰めてたなんて。

（蘭の性格だ。恐怖を振り切ってまで何かのために突っ走る女だ
ってことを考えなかったのかよ、テメーは）

「ごめんな」

もう一度、俺は呟いた。もう潮時かもしれない。

せめて、こいつにだけは正体をばらしてもいいのではないだろうか。

いや、報せてやりたかった。

俺はここにいる。

お前の知っている俺は、人殺しなんてしない。
お前のことを、忘れはしない。

「しん・・・いち」

髪を触っていた手を止めた。うつすら、蘭の目が開いたように見えた。

「・・・死羅・・・神さま・・・？」

消え入りそうな言葉で、蘭が言った。

「助けて。・・・・・・新一を、元に・・・」

「わかってるよ、蘭。大丈夫だ」

俺は片手で無造作に白髪のカツラを取ろうとした。が。

「助けて、・・・・・・お願い。し・・・ちを」

（・・・！？）

ズキン、と頭が強く痛んだ。

まただ、あの時の痛み。

あれから一度もなかったのに。

”助ける？”

誰を？

何から？

はっと我に返った。

あの湖の中で俺が強く感じたもの。悲しみ。痛み。

あれは、熱や、クスリの副作用だけではなかったはずだ。

小屋で見つけた机に刻まれた言葉。

”失敗は死あるのみ”

あの人は自らの死を覚悟にしてまで俺を憎んでいる。

そして、追い詰められている。

俺はその気持ちを真っ向から受け止めることができるか・・・？

憎んで、憎んで、元の自分の姿を捨ててまで憎んだ相手にならなくてはいけない気持ちにまで追い詰められたあの人を、俺は迎えることができるか？

救えることができるか？

今のままじゃ、助けられない。

俺を湖から助け出してくれた”何者か”の頼みも聞けない。

それが、この世には存在しないはずの”何か”の頼みであったとしても、ただの幻聴だっただけのこともかもしれない。

あの人を、死なせるわけにはいかない。

「蘭、ごめんな」

俺はそう呟き、立ち上がった。

もう時間がない。いつ、元に戻るかもわからないこの状況で、いつ起きるかわからない蘭とずっとここにいるわけにはいかなかった。勿論、できる限り傍にいてやりたいが。

けど、時間がないのだ。

まだ、準備が足りない。あのひとと向き合うための準備が。

もうすぐ服部たちが蘭を探しにやってくるだろう。それまでの辛抱だ。

いつのまにか再びすやすやと寝息を立てている蘭に、俺はくすりと微笑んだ。

「・・・また、後でな」

もうすぐだ。

もう、逃げも隠れもしねーから。

おめーの心の中にある不安も何も取っ払ってやつから。

だから、それまで。

待ってろよ。

俺は、歩きかけた踵を再び蘭の方へ返して歩き出すと、しゃがんで蘭の頭を撫で上げ、そうして小屋を後にした。

遠くで、服部が蘭を呼ぶ声がした。

n
 $>$

$<$
 F
 i

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4350g/>

声。

2010年12月22日15時19分発行